

渡辺哲男編著

『ポップカルチャーの教育思想
—アカデミック・ファンが読み解く
現代社会—』

見洋書房 2023年 本体2300円(税別)

菊地 虹 (立教大学大学院)

本書は、研究者でありながらポップカルチャーの受容者でもある立場から自らの趣味を自身の研究の手法から論じるという、日本における「アカデミック・ファン」研究の先駆的な一冊である。目次には、ガンブラ、マンガ、推し、コミケなど、いわゆる学術書では目にする事が少ないワードが並ぶ。アニメやマンガを「研究」する、しかもときにはその文化を享受する「ファン」の立場から語られるという点で、本書が挑戦的な書籍であることは改めて確認するまでもないが、一体何に「挑戦」したのかということについて今一度整理して示したい。

編著者の渡辺によれば、本書のようにポップカルチャーを研究ないし教育に接続し考えることは、教員として行う授業が退屈なものにならないよう工夫する中で日常的に考えてきたからこそ可能であったという (pp.169-170)。ともすれば、本書での「挑戦」は一見「教育学」の外にある領域へ向かう逸脱的試みととられるかもしれないが、教員が普段から「大衆」である学生に対してどのように学術的な話題を提供できるのかという、現場単位での現実的な「挑戦」が出発点になっていることが伺える。

また、本書は一貫して、「ハイカルチャー」と「ポップカルチャー」、「現実」と「虚構」、「才能」と「努力」、「当事者」と「批評者」など、二元的に分け難い「あわい」をありのまま描き、切り立った急斜面の山の峰を歩くかのようなスリリングな論が展開されている。特に、執筆にあたって自身の趣味を研究者として批評・分析することへの苦悩があったことが明かされているが、村松によれば、距離化(批評)の言葉で語ることによって、かえってその文化独自の「独り占め」感や「没頭」が失われることを危惧していた (p.100)。その際、渡辺にとって同僚でもある河野哲也氏から助言された「思い切り趣味でいく」べきという言葉で、本書の方針が定まったという。しかし、各章の論述は読めば読むほど面白いほどにアカデミックライティング

の型を守っており、その内容は実に新鮮な切り口を呈している。

序章(田中著)では教育とポップカルチャーの関係性を再考し、近年のデジタルメディアの参入による「動画化」の傾向に着目しながら、本書の試みとその可能性を示している。第1章(渡辺著)では、『ガンダム』に登場する「グフ」の描写に関する後年の「解釈」の変遷をプラモデルの説明書の歴史を追うことで捉え、「ありそう」な「物語」が「創られる」過程が論じられている。第2章(間篠著)では、現代スポーツマンガをケースに、時代の中で「トーナメント」システムから次第に「カードゲーム」のような凡人である個々がいかに「生きる」かを考える努力観へと変化したことを考察している。第3章(小山著)では、『ジョジョ』の第七部・第八部を手がかりに、「人間讃歌」と「回転」・「球体」表現が〈小さな神々〉と〈唯一神〉に対応した物語の構造に着目し、3.11以後の作中の「宿命」観の変化を捉えている。第4章(村松著)では、アイドルなどを応援する推し文化をケースに、自らも「推し活」をしている著者自身の視点を交えながら、現代の「引きこもらないオタク」の「へだたり」に支えられた「主体」のあり方について記述している。第5章(古仲著)では、コロナ禍における音楽シーンのライブイベントからオンラインへの移行とその影響について、YouTubeなどを例に一回性・再現不可能性や相互作用性を軸に詳らかにしている。第6章(山本著)では、多様な表現者と参加者が集う「コミケ」の「場」としての性質に着目し、コミケに参加経験を持つ著者の視点からオンラインにはない「直接経験」の代替不可能性に言及している。終章(渡辺著)では、『シン・エヴァンゲリオン劇場版』の終盤に繰り広げられる父子の戦いと、映画『人間蒸発』のメタ的に特撮セットを用いたケースを比較検討し、「現実」と「虚構」の単なる二項図式に収まらない「共生」的な思想を取り挙げて検討を加えている。

いざ要約すると、読んでいる間に何度でも口角が上がったあの独特な面白さを伝えきれないことに気が付く。書籍紹介をする身としては不徳の極みであるが、それだけ本書の内容が具体的な事例をもとに展開しており、充実しているがゆえのことだろう。

ところで、本書は表紙の装丁が綺麗でなかなか良い。本棚に置けば部屋はたちまち素敵なお書齋に早変わりし、そしていざ本を開けば、我々を含めた「大衆」が直面する教育思想への「挑戦」の扉が開くことだろう。すなわち、必読必携の一冊である。